

トークセッション

【司会】

新田 義修（岩手県立大学研究・地域連携本部 副本部長）

【登壇者】

山本 正徳（宮古市 市長）

鈴木 厚人（岩手県立大学 学長）

内田 信平（盛岡短期大学部 准教授）

小沢 愛美（盛岡短期大学部 2年）

植田 眞弘（宮古短期大学部 学部長）

大堀 匠（宮古信用金庫営業推進部地域支援課
兼総合企画部経営企画課 課長代理）

【新田】 ただいまからトークセッションを始めます。トークセッションは先ほど報告していただいた5名の方に加えて山本市長に参加していただきます。本日は「宮古の未来を考える」をテーマとしています。

では、最初に住民参加の地方創生とは何かという鈴木学長からのメッセージに対して少し議論したいと思います。鈴木学長から説明のあった住民参加によるまちづくりについて、質問がある方、まず受けたいと思います。

【一般①】 鈴木先生の資料の中で日本は欧米に比べ、市民を話し合いに参加させる仕組みが極めて弱いとありました。司会の方がおっしゃられたように単にイベントに参加するだけではなく、意思決定にどう関わっていくかということが住民参加を考える上で大事ではないかという御指摘だったと思うのですが、弱いだけでも、その点を活発にしようということで、このような機会が設けられ、今まで報告があったような取組もされているのだと思いながら聞いていました。今後住民参加を進めていく上で、十分

意見を聞けるような段取りで進めていただきたいと思うのですが、いかがでしょうか。

【鈴木】 一般論から言うと、宮古市だけでなく、おそらくどこでもそうすべきだと思います。というのは、行政は行政で今までの流れがあり、その中で様々な取組を行っています。また、市民にも同じように流れがあって、行動しているのではないかと思います。そのため、どちらからもこれまでのやり方を破らなければいけません。市民のほうからは、とにかく口酸っぱく意見を述べる習慣をつけ、行政のほうもそれにどんどん耳を傾け、これまでの流れを変えていこうという努力が必要になります。大学の我々が仲介役になってもよいです。とにかく市民と行政の間で意見の交流が活発に行われるような、新しい習慣をつくらなければなりません。

【植田】 様々な委員会の委員長をしたときに感じたことですが、市役所の担当者の方は、市民の方は委員会の委員になっても発言してくれないということでもいつも悩んでいらっしゃいます。だから、委員長として、もっと意見を出せるような場を設定してほしいということで、5人ずつぐらいの小グループに分けて、そこでどんどん発言してもらうようにしました。

行政の方、市役所の方のもっと市民の意見を聞きたいのだけれど、なかなか発言してくれない。反対に市民の方は、なかなか我々の意見を言う場がないと言います。これは両方に問題があると思います。やはり、先ほど発表してくれた大堀さんの結論の部分にもありましたが、行政と市民の連携、そしてその背後にある信頼関係が大切だと思います。

北欧では、なぜ高い税金をとっても国民からそんなに反発が出ないかと言うと、その税金で確かに福祉を充実してくれるという国民と国の信頼関係があるからです。今の日本で税金をもっととるぞと言われたら、おそらく国民は嫌がりますよね、その税金は何に使われるのだろうと。特に宮古市は自治基本条例や参画協働条例を持っているので、少なくとも東北の市町村の中で一番市民参画ができる体制や制度が整っているわけです。市民

と行政が一緒になって地域づくりができるこの制度を、仏様に魂を入れて実質的なものにしていかなければならないと思います。市民と市の意見交流の場を、どうつないでいくかということが課題だと思います。また、今回我々がこの講座を準備したのもまさに宮古でそのような環境をつくっていきたいということが狙いの一つでもあります。

【新田】 これについて御意見がある方はいらっしゃいますか。ここの部分が社会的持続性を考えるポイントになると思います。お互い意見が言いやすい環境をつくっていくためには、信頼関係が必要になるというコメントだったと思います。

【一般②】 参考になるお話をありがとうございました。宮古でお世話になって私は5年目になります。植田先生がおっしゃっていたように、あとは魂を入れるだけという程に制度が整ってきており、大変感心しています。

しかし、それらを生かすために幾つか気づいたことがあります。行政の1つのプロジェクトといいますか、大きな仕事を持っていく際のスケジュールというのがあると思います。よくロードマップという形で示されますが、一般の市民、県民は、自身の普段の暮らしや仕事の中でそれがどのように自分に影響してくるのかということは、なかなかイメージしにくいと思うのです。そういったところの基本的なリテラシーをきっちりと学べるような、サポートや土壌づくりをこれからしていかないと、市民参加の制度の魂入れの部分は、なかなか進まないのではないかと思います。

震災の復興や、今回の台風10号のことなど急を要することばかりで大変ではあるのですが、できるだけその前の段階で、白紙でディスカッションができる場を確保して、そこで普段考えていることを、恥ずかしがらず自由に話せるような雰囲気をつくることができればと思います。特に18歳から選挙権が与えられたということで、様々な市民参加の仕組みが整い出していますので、これからの学校教育やこのような場で、あまり準備をし過ぎず、フリーディスカッションできるような経験を積み上げていって、北

欧のようになれたらと感じています。

【新田】 意思決定の方法というのは、今回の震災で今までとは随分違う方向に変わったと思います。以前と比べるとかなり時間をかけて様々なことを決めていたのではないかと、神戸と山古志と比べて私自身は思います。この点についてどのようなワークショップをするのか、スケジュールを考えると何がポイントになるのか、内田先生から感想をいただけますか。

【内田】 市民の意見を取り入れると言っても色々な方法があります。ワークショップ形式で、皆で集まって話し合うというようなこともあるでしょうし、地域で説明会をやって意見を募るといった場面もあるでしょう。また、そもそも議会に出てきている議員の方というのは、市民の代表として選ばれているわけですから、議員の方が集まって行われる市議会というのもある意味市民の意見の集約の場でもあるのかもしれない。

私が今日報告したような取組は、市民が集まって話し合うということで、一定の成果を出しやすいところなのだと思います。その一方で、例えば藤の川の防潮堤しかり、あるいは欽ケ崎の防潮堤しかりですが、人の命を守るためのハードウエアになる部分、それも何億、何十億円という単位で考えていかなければいけない部分を、市民で集まって仲よく決めましようとは、なかなかならないと思います。ですので、行っている事業の性質によって、それに適した意見の求め方、意見の示し方というのがあるのではないかと思います。

【鈴木】 何か例を作ってみたらどうですか。テーマを設定して、徹底的に行政と市民で議論するのです。まずは1歩踏み出すことが必要だと思います。そうすると様々な問題ができてきて、先に進むと思うのです。このようなことを提案したいと思います。

【山本】 宮古市の場合は基本自治条例で参画と協働をうたっています。そのため、企画のときから市民一体となって取組をさせていただいています。震災後に関しても、まちづくりも含めて、白紙から自分たちが住むまちを

どうするかという話をさせていただきました。ただ、あまりにも白紙過ぎて何をどうすればいいのかわからないという地域がたくさんあったのも事実です。

試行錯誤しながらできるだけみんなで作るまちというのを目指してはきています。これがパーフェクトにできているかと言われれば、そうではありませんが、少しずつ市民の皆さんが参画するようにはしているつもりです。審議会や会議はすべて公募の制度をとっています。委員会は、平均的に2名程度は公募の委員で構成をするようにしています。しかし広報の仕方が弱いのか、それとも関心がないのか、なかなか公募の委員がいないというのも現状です。

みんなで作るまちの実現のためにも、どんどん御自身の意見をおっしゃっていただきたいです。民主主義ですので、意見がすべて通ることではありませんが、たくさんの人たちの意見を得て、そこから行政は取組を進めていくということになると思います。

【新田】 それでは、内田先生のテーマに移ります。内田先生は宮古のまちに賑わいをもたらすために、様々な取組をしてきました。一番大きいのは検討する機会を提供するということだと思います。今お話しいただいたような自分たちの意見をどこに言うのか、そしてそれをどのようにして形にするのかということを考える上で、1つのモデルケースになったと思います。

内田先生は何をしたいのか、そしてどう過ごしたいのかということを経験に挙げて今回のまちづくりにかかわる様々な取組を実行されました。ワークショップで取り入れたまち歩きやシナリオづくりの有効性というものを振り返り、それが市街地の活性化にどうつながったのかということまで検証して、そしてまた議論する場所に戻ってくるのだと思います。このプロセスをどんどんテーマを増やし、実際にそれを実行するという形を繰り返すことによって、PDCAサイクルが生まれ、地域の蓄積がなされ

ていくのだと思います。

この点について御質問、御意見を申し上げます。

【一般③】 高齢者ですが発言させていただきます。先ほど植田先生や山本市長がおっしゃったように、宮古の人たちはこのような大きな会議で意見を述べるのが非常に不得手なのです。思っていることもそのことをうまく言い出せない人たちが多いです。私もそのひとりです。

先ほどは、若い方々が一生懸命になって取り組んでいることを発表していただき、感激いたしました。宮古の若い人たちは本当にすばらしいと思いました。しかし、やはり年配者というのも知識や知恵を持っているはずなのです。そしてなぜそこに、年配者も入れてくれないのだろうと思ったのです。これは少し話が反れるかもしれませんが、町内会をもっと利用してほしいと思います。小さなことですが、駅前の駐車場の清掃や花壇の手入れ、花植えを行ってきました。しかしその後の手入れというのが市では全くなされないのです。時々その意見を書いて出すのですが、全く取り上げてもらえません。

まちの中をきれいにするというのが、まちに賑わい生み出すために基本的なことだと思うのですが、いかがでしょうか。思い切って意見を述べさせていただきます。

【内田】 貴重な御意見をありがとうございます。まず、宮古の人はこういった大人数の場で、意見を言うのが苦手な人が多いのではないかというお話ですが、先ほど紹介したワークショップという形式の会議では、5、6人ぐらいの小さいグループで、話し合いをするという形をとることが多いです。そうすると、20人、30人の教室で発言をするよりは、意見が出やすくなると思います。

それから、今回のまちづくり市民会議で若い人たちを中心にした大きな理由としては、これからの宮古のまちで過ごしていくのは、やはり若い人たちだろうということで、高校生、短大生、それから若い世代の社会人の

方に声をかけて取り組みました。ですが、今後継続していくのであれば、当然もっと幅広い世代の人に参加してもらえるような場というのも必要になってくると思います。実際に11月6日のイベントでは、昔遊びの体験を取り入れたり、みやっこモンスターの古い地図をつくったりしています。モンスターの名前の由来になった宮古弁を子供がどういう意味だと、おじいちゃん、おばあちゃんに聞くきっかけになればという気持ちもあって、このような仕掛けを入れてみました。

最後に町内会についてお答えします。私は滝沢市のとある場所に住んでいて、町内会があるのですが、そこでも花壇をつくるという活動があります。6月になると皆で植えますが、その後は誰も面倒を見ないと聞いて、私も人事ではないと感じました。花植えに限らず、何かのイベントに取り組んだときに、そこで終わりではなく、その後もしっかり面倒を見ていくというのは、大きなことでも、あるいはもっと小さなことでもきっと大切になっていくのではないかと思います。

【山本】 宮古市では、震災後に色々なところを整備してしまして、その中に立派な花壇をつくろうという取組もあります。それには、まず花壇は必要なのか、必要であればどこに植えるのか、その後は誰が管理するのか、またどんな種類のを植えるのかなど様々なことを、地域の方々とよく相談して決めなければなりません。町内会で引き受けもらえるように、市で整備する部分も含めて、これからしっかり話し合いながらまちづくりをしていきたいと思っています。

また、おっしゃるようにきれいなまちは、誰もがまた行ってみたいと思うでしょうし、住むまちが汚れているよりもきれいなほうが気持ちよく過ごせるのは当然のことです。ですから、そのような宮古市にしていけるようにこれからも取り組んでいきたいと思っています。ただ、行政の力だけではなかなかできないことですので、皆で協力し合って進んでいけるような形にしていきたいと思っています。

【新田】 この件について何か御意見がある方いらっしゃいますか。

【一般④】 また年配の者ですが、少しお話をさせてください。高校を卒業して宮古を出ました。64歳でまた戻ることになったのですが、帰ってきたら随分変わったなという印象を受けました。海と山と川というのが宮古のキーワードであったと思うのですが、どうも海との接点が生活の中で失われてきているように思います。

そのように感じながら生活する中で、さきほど若い方々のワークショップのお話や、市街地活性化のお話を聞き、60歳を過ぎた私でも、参加できるようになればいいなと思いました。

活性化の話では、特に末広町と中央通り商店街については撤退している方々が多く、閉鎖された後は、ボランティアのための施設や障がい者の方を支援するような施設ができています。商店によっては、もう後継ぎの方は別の仕事に就いていて、店主がいなくなった後はお店を閉めるしかないというところもあるそうです。このような場所の次の展開を、何か探せないだろうかと考えていました。具体策があるわけではありませんが、そこに住んでいる人たちや宮古の海と山と川に囲まれて生きている人たちが、自分のまちに誇りを持って、満足できるということが一番重要なのだと考えています。若い人に戻ってきてほしい、あるいは移住してほしい、新しい企業に入ってきてほしいというのはまた次の話で、まずは今住んでいる方々が幸せを感じられるまちづくりを私も応援したいと思っています。

【内田】 御意見どうもありがとうございます。今ですと、すぐに他の地域から人を呼び寄せようという話になりますが、まずは今住んでいる人が誇りを持って暮らせるようなまちにすることが大事だという御意見は全くそのとおりだと思います。

今回のワークショップには、色々な方に参加していただいたのですが、商店街の事務局の方や少し離れた場所でお店をやっている方、若手のリーダーとして参画してくれた方が多く、いわゆる商店主の後継ぎ、せがれの

代の方はあまり積極的に参加していただけない形でした。ぜひ参加していただきたいのですが、やはり無理して参加してもらってもあまり意味がないとも思います。

これまで、商店街の皆様によくの御協力いただきながら活動してきました。この2年間の活動で、既存の商店街の2代目、3代目だけではなく、広く、若い世代の人たちに近づきながら、一緒にやっていけそうなところまで、取組を進められたのは、非常に大きなことだったと思います。例えば、イラスト制作や商品開発の小さな会社を興した20代の御姉妹や、まち中で映画祭をやろうと考えているNPOの方などと、少しずつまちづくり市民会議も関係ができてきているので、既存の商売とは別になりますが、新しく宮古で仕事をしよう、宮古で何かやっという人たちと、ともに活動していければと思っています。ワークショップに毎回学生を連れてきていますが、他の地域に住んでいる若い学生が、まちに何か作用してくれるといいなという気持ちで、一緒に活動していました。

【小沢】 私は宮古市出身ではなくて青森県出身なのですが、初めてワークショップに参加してまち歩きをしたときに、私の地元比べて若い人が集まり、ゆっくりできる施設が少ないと感じました。また、ワークショップに参加している高校生から、勉強がしたいけど、そのための場所がないという話を聞いていたので、使われていない商店街のスペースや空き家、空き地になっている場所をうまく活用できたらと考えていました。

【内田】 私からも、もう一つだけお話しします。今回はイベント的に行いましたが、将来的にはそのような空きスペースを使って色んな人たちが新たに何かをやったり、お店をやったりということのきっかけづくりにつながっていけばと思います。

昨日は釜石に宿泊していたのですが、釜石はすごいです。ガーンとイオンをつくってしまったわけです。そこに行けば流行の服でも何でも買えますし、高校生もコーヒーを飲みながらお茶もできるでしょう。あのよう

イオンをつくるのがいいのか、あるいは空き店舗を少しずつ更新しながら商店街を楽しいところに、高校生でも少しは行きたいと思うようなところにしていくのがいいのか、今後のことを釜石の夜景を眺めながら改めて考えていました。

【山本】 やはりまちというのは、そこに住んでいる人たちが楽しく住める場所のことをいうのだと思います。ですので、市民の皆さんが、まちの中を上手に使えるようにしていきたいと思います。そのために、商店街というのは、私は必須だと思うのです。まちの中に商店街があるほうが、市民にとって利便性がよく、まちをうまく活用できるのではないかと考えています。

現在宮古市として、駅を中心とした津波復興拠点施設整備事業を行っており、中心市街地づくりに取り組んでいます。賑わいの空間をどのようにつくれば、市民の皆さんが利用しやすく、そして楽しく過ごせるのかということは、市だけではなくて、市民の皆さんの意見を取り入れながら進めていきたいと思っています。それらの意見が集まった形でまちがつけられていけばと考えています。

【新田】 それでは、3つ目です。豊かな暮らしをするという意味で今何をすべきか。植田先生のグループの報告について議論をしたいと思っています。

この中では、地域の多様なプレイヤーについてという視点で、横のつながりをどのようにするかということを御提案いただきました。ステークホルダーや外部との関係はどのようになっているのか、また、最終的にはビジネス面では競争することになりますので、その部分をどのように差別化していくかということが必要になると思います。

宮古に限らず岩手県の水産業、特に加工業は単体では、どうしても資本力が他の地域に比べると少ないので、チームを組む、あるいは地域としての差別化を加えていかないと、なかなか水産業を加工業として維持するのは難しくなっていると思います。これらについてどなたか御質問、御

意見がありましたら手を挙げていただけると助かります。

【一般⑤】 今日は大変興味深いお話をありがとうございました。11月6日のわくわくストリートでは、宮古恵風支援学校の子供たちが何人かお世話になり、楽しませてもらいました。通りが狭く、子供たちにとって危険な場所がありましたので、歩行者天国であれば、なおよかったです。

今日の配布資料を拝見する中で、キーワードとして共生社会というのが一言入っているとよかったのではないかと思いました。地域の産業振興を担う若い力が必要だという点について、障がいを持っている若者たちはたくさんおりますので、その力をうまく活用できるような方策というのも同時に考えていただければと思います。我々もそのような働く力を十分に育てていきたいと考えていますので、連携のほうをよろしくお願いします。

【植田】 共生社会、大賛成です。先ほどの大堀さんのプレゼンテーションにもありましたが、震災の後、水産加工業者の人たちと随分一緒に仕事をするようになりました。実は私は経営学者ですから、企業経営についてアドバイスを求められたら顧問料10万プラスすると言おうと思ったのですが、彼らは違いました。自分たちの会社が儲かりたいのではなく、宮古の復興のために自分たちの会社の競争力を高めて、会社としての収益を増やすことが目的だと言っていました。これは何のためにやっているかと言うと、地元の雇用を増やすためだそうです。

ワーキングプアのような労働環境ではなく、きちんと最低限の生活を営める給料が払いたい、そのために収益を高めたいのだと話していました。その中にはもちろん障がい者も入っていました。まさに共生社会です。障がいのある方もきちんと雇用し、その結果その方たちが経済的に自立できれば、働く意味やプライドを感じることができると思います。

現在、宮古の若い事業者たちは、企業利益を地域経済のためにという視点を持って活動しています。まさに御指摘いただいたことを、少なくとも私の周辺にいる経営者の方々は追究していると思っています。

【山本】 現在は、障がい者、健常者と区別して明記しなくても、それらすべて含んで考えておりますので御安心ください。植田先生がおっしゃったように、障がい者の方や、定年を過ぎても働ける人たちはなるべく雇用して働く場をつくりたいというのが、漁火の方々の考えのようです。その点も含めて、我々もそのような形で雇用の創出ができればと思っています。

【鈴木】 私の講演の中で、開いた2つ（自治体と住民）の手が、隙間を埋めるように組み合わせさせたイラストを紹介しました。それは、ある研究会での新田先生の発言がヒントとなり、思いついたものです。

現在、社会福祉学部のある先生が、岩手県が主導しているバリアフリー社会の実現に取り組んでいます。岩手県全体をバリアフリーにすることは、莫大なお金がかかるため、不可能です。

新田先生は、“ヨーロッパでは障がい者の方が自らを障がい者と意識しないくらい当たり前で生活できる場になっている。それは市民が、声をかけなくても、段差のあるところに車いすの人がいたら、必ず手を貸してくれる。単に行政の施策だけでバリアフリー社会の実現には限度がある。そこに市民が入って一緒にならないとバリアフリー社会の実現は無理だろう”と言われました。

これはヨーロッパの社会福祉、障がい者に対する市民の感覚から来ています。ヨーロッパではこの感覚を当たり前と思っているのです。これはひとつの文化です。文化と言うと、日本では、別次元の話だと捉えられがちですが、そうではなくて文化イコール習慣だと思うのです。

そこで、市民が行政の中に入って行って、バリアフリー社会の実現の施策を補完する。これによって障がい者の方々が意識せずに生活できる。これも1つの市民参加と考えて、あの絵を描きました。

【学生①】 共生社会というお話に関連づけての意見です。私が小学生の頃、新巻鮭をつくるという体験授業がありました。しかし、それ以降は、漁業のまちだからか、漁業のことは知っているだろうというふうに、私たち高

校生には全く漁業についてのPRがなかったように思います。この点についてはいかがでしょうか。

【山本】 教育に関して、気づけていない部分が我々のほうにあるのかもしれないと、今の御意見から感じました。おっしゃったように知っているから大丈夫ではないかというのは、確かにあったと思います。きちんとそれらの実態を教えていただければ、我々のほうもそれに答える形で教育をしていきたいと思っています。

住むまちのことを知らずに、他の人に自分のまちの魅力や、おすすめの観光地を教えることは難しいです。そのため、宮古の子供たちが宮古のよさ、魅力的な場所、風習などを覚えて大きくなってくれるような教育を、しっかりしていかなければならないと感じました。また、気づかないで大人になった方々のために、もう一度宮古を見直すための試みも官民一体となって取り組んで行きたいと思っています。

【大堀】 今回の事例で紹介した漁火も入っていた共和水産などは、小学生を対象とした社会科見学を行っており、また、他の製造業でも工場見学を計画して少人数、学校単位での受け入れをしています。私は青年会議所活動も行っているのですが、今年の8月には小学生を対象に、いわゆるキッズニアのような宮古の実際の職業を体験できる仮想のまちで、お金を稼いでそこで使ってみようというイベントを企画しました。今年は80人くらいの子供に参加していただきました。このような形で1つの職業だけではなく、まち全体で、こういった職業があって、宮古の誇るものは何だろうということを、やはり一社だけではなく、色んな大人たちが一緒になって、教えていく必要があると思います。この「こどものまち」は、今のところ青年会議所では来年も再来年も続けていく予定です。こういった形でまず小さい頃に自分の両親だけではなく、周りの大人がどのようなことしているのかを知る機会を、まちを挙げてつくっていくべきだと思っています。

【一般②】 2回目の発言になります。市民参加ということと、先ほどの産

業についてのお話に絡めて発言させていただきます。若い世代の方々の今後の活動への期待が大変ありますし、また人生の先輩である高齢者の方が持つ経験や、ネットワークも素晴らしいものだと思います。これらをフルに生かしていくことで持続性というものが発揮されるのではないかと感じました。

私は地域での様々な説明会によく参加するのですが、会によって参加者の層が異なる印象を受けました。以前参加した花輪地区の行政説明会では、市の幹部の方がズラッと集まっている中で、その方々よりも地元の参加者の人のほうが少ないように感じました。それから、まちづくりのほうの皆さんは、テーマコミュニティを形成し、比較的若い方々、同じ関心を持った方々が集まっていました。

地域のほうにいきますと、そこには若い方々がいらっしゃらなくて、各家の世帯主の方や地域のずっと地域づくりを熱心にされてきた先輩方が何人かいらっしゃる印象でした。また、そのような市民参加の場で、若い人と高齢者の方が分断されているような状況が見てとれました。

せっかくこのような機会があるので、縦の世代間の交流がある状況をぜひ目指すべきではないかと思います。そのことによって、まちの賑わいづくりにしても、各地域の課題にしても、問題解決に向かっていき、皆さんがまちづくりに参加できる形になるのではないかと思います。1つの提案ですが、地域の懇談会、あるいは議会の報告会において、行政の方々と地元の方々の座っている位置を逆にしてしまうというのはいかがでしょうか。つまり地域のほうで色々先導して、こういったプランがあるのだということを発表し、それに対してその地域に来られた行政の各分野の方が質問をします。そうすると地域計画と市の総合計画がしっかりとかみ合っていくのではないかと思います。

若い皆さんにはどんどん地域に入っていただきたいです。それから、まだまだ若いベテランの方が、年齢制限のあるコミュニティでも、ぜひ見学

したい、若い人たちを応援したいから自分も参加したいという意思表示を遠慮なくできるようになればよいと思います。

【山本】 御意見ありがとうございます。参考にさせていただきながら取組を進めていきたいと思います。

【新田】 ありがとうございます。これまでの議論にもつながる貴重な御意見だったと思います。

私は農業経済学が専門なのですが、その際、理念というものを大切にしています。市役所あるいは商工会議所、農協や漁協などにおいて、これから先の宮古の方向性をどうしていくかという議論をしたと思うのですが、もし次の機会に検討する機会があれば、ぜひ今後の方向性を決める根となる理念を、大切に考えてほしいと思いました。

宮古という場所は当然ここしかありませんので、ここにある資源を生かすために、地域のいいところあるいは変えていくべき課題を皆さんずっと検討していると思います。ここの部分はそもそも宮古の未来とは何なのだというところを改めて考えていただくと、必要なもの、あるいは必要でなかったものというのが見えてくるように思いました。

ここで、本日のまとめです。宮古のこれから先の未来を考えるときに、まず1つ目に必要になるのは、内田先生たちが取り組んでいらっしゃった賑わいです。これはどこでも同じです。賑わいがなければ、その地域に住んでいるという実感もないし、ここに住みたいという気持ちも出てこないのだと思います。暮らしの中で、この大事な部分をどのようにつくっていくのかということが重要になります。意見を自由に話せる場を持ち、それを受けて、行政や事業者が次のアクションを起こすという流れが、今まで以上にうまくできるようになってくると、賑わいというものとは結果的に戻ってくるのだと思います。

2つ目は当然ですが、生活する上で必要になる、どこでお金を稼ぐかというところだと思います。この経済行為ということ考えたときに、他の

地域、あるいは宮古が持っている資源をどのように活用していくのかということは、企業を経営している人たち、またそこで働いている従業員の人も含めて考えていくべき内容だと思います。経済的な意味での見劣りがしないような状況に少しでもなってくれば、外に出ていく人も総体的には減るのだと思います。

最後は学長の講演にあった住民参加についてです。これは経済活動と社会活動と両方に関わってくると思います。どちらにしても皆さん自身がそこに関わっているのだという実感がわくような流れができてくると、恐らく将来皆さん自身がここに住んでいてよかったなと振り返るような日が来るのだと思います。

先ほど会場から、久しぶりに宮古に戻ってきたら、昔と違う印象を受けたというお話がありましたが、まさにそこだと思います。皆さんが振り返ったときに、ああ、随分よくなったなと思える姿を描くのは皆さん自身ですので、ぜひこの部分をどこかで思い出していただければと思います。